

韓国における民主化過程と社会運動 : 釜馬地域の 民主化運動を中心に

著者	鄭 有景
ファイル(説明)	学位論文の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第9号
URL	http://hdl.handle.net/10232/21913

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	鄭有景 (チョン・ユギョン)
学位論文題目	韓国における民主化過程と社会運動 —釜馬地域の民主化運動を中心に—
<p>本論文は、韓国の地方都市における民主化運動を事例として取り上げ、その展開過程と運動の戦術などを分析し、地方における民主化運動はどのような背景や特徴を有していたのかをイベント分析と政治的機会構造論という分析手法を用いて論じたものである。</p> <p>「はじめに」では、地方都市における民主化運動を研究対象とした意味、目的などを述べ、これまでの先行研究を整理したうえで、本論文の研究史上の意味を論じた。</p> <p>「第1章」では、本論文で行う分析の理論的前提について論じたものである。つまり、本論文でキーワードとなる社会運動及び民主化・民主体制・民主化運動に関して説明した。また、本論文で主に用いる分析手法としてイベント分析と政治的機会構造論を使用する意図及び2つの分析手法の概略を説明した。</p> <p>「第2章」では、釜馬抗争に関して、運動発生の背景と釜山・馬山地域での運動の経過に関して論じた。釜馬抗争が発生するまでの独裁政権の抑圧的な政治体制下での社会・経済的な状況と釜馬抗争との関わりを明らかにした。そして、釜山と馬山を中心に発生した釜馬抗争の経過を述べ、それぞれの地域における運動の展開過程を論じた。</p> <p>「第3章」では、第2章で取り上げた釜馬抗争に関して、イベント分析と政治的機会構造論を用いて分析を行なった。イベント分析では、運動における抗議イベントを詳細にコーディングマニュアルに記し、運動の主体や戦術の分析によって、釜馬抗争は自然発生的に発生し、事前の計画などは不可能であったことなどを明らかにした。そして、政治的機会構造論を用いた分析により、運動の主体が当時の政治的機会をどのように捉えていたかを明らかにした。さらに、釜馬抗争が発生した当時の独裁政権による政治的機会の実体を緊急措置や学内視察、学徒護国団の分析によって明らかにし、当時の政治的機会がかなり制限されていたことを論じた。</p>	

「第4章」では、釜馬抗争から6月抗争が発生するまでの韓国における政治的状況の変化と社会運動の変化について、1980年代を中心に論じた。次に、6月抗争の引き金になった朴鐘哲拷問致死事件と4・13護憲措置宣言を述べたうえで、6月抗争の展開過程を明らかにした。その際、ソウルを中心とした動きと釜馬地域を中心とした動きにそれぞれ言及しながら、中央と地方の運動の相互関係を視野に入れて運動の経過を述べた。

「第5章」では、イベント分析と政治的機会構造論を用いて6月抗争に関して分析した。イベント分析によって明らかになった6月抗争の特徴は、釜馬抗争と異なり運動組織を持つことによって運動が計画的・長期的に行われたことであった。

また、6月抗争における政治的機会構造は、当時の政権下で進められた1980年代の融和政策により政治的機会は拡大しつつあった点を明らかにした。しかし、運動発生の際に催涙弾発射などの暴力的な鎮圧やマスメディアの政権側への偏りなど、政治的機会は完全に拡大していたわけではなかったことも指摘した。

以上の分析をふまえて「おわりに」では、釜馬抗争と6月抗争の共通性と相違点を整理し、釜馬地域における民主化運動が持った意味を示した。つまり、民主化運動がソウルだけではなく、地方都市でも発生し、3・15記念塔を拠点とした馬山での運動のように地方都市での社会運動には独自性もみられた。このように、70年代の釜馬抗争と以後の80年代の6月抗争までの民主化運動の過程を通して明らかにしたことは、民主化運動の積み重ねは理念としての民主主義から制度としての民主主義を構築していく過程であり、その結果、韓国は民主体制に移行したことを論じた。

平成20年2月12日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 鄭 有 景

学位論文題目

韓国における民主化過程と社会運動－釜馬地域の民主化運動を中心に－
(The Democratization Process and Social Movement in South Korea ; Focusing on
Democratic Movements in Busan and Masan)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

鄭有景氏の博士学位請求論文「韓国における民主化過程と社会運動－釜馬地域の民主化運動を中心に－」は、1970年代末から1980年代後半にかけて韓国で展開した民主化運動を、韓国南部に位置する釜山と馬山という2つの都市における運動を取り上げ、地域レベルでの運動の実態を解明することを通して、韓国民主化運動に新たな光を当てようとした論文である。具体的には、1979年の釜馬抗争、1987年の6月抗争という二つの事件に際しての釜山・馬山両都市における社会運動について、イベント分析による運動実態の詳細な解明と運動形態の特質の解明を行い、さらに政治的機会構造論の観点から、当時の政治体制と社会運動の関係を明らかにすることが、主要な内容となっている。そして、この分析を通して、韓国の民主化運動の地域的な広がりを考察するとともに、70年代末から80年代にかけて、韓国の社会運動が自然発生的なものから組織的な運動へと変化し、運動が掲げるスローガンもまた独裁反対という抽象的なスローガンから改憲要求という具体的なものに変化したこと、そうした変化が社会運動の経験の蓄積及び政治体制の変化と関連していることを明らかにすることを目的としている。

2. 論文の構成

論文では、「はじめに」において、韓国民主化運動に関する従来の研究が、1980年に発生した光州事件に集中しており、また、1987年の6月抗争等の研究もソウルを中心とした動きに偏っており、地域レベルでの運動の実態についての研究は極めて不十分であることを指摘している。また、光州事件前夜に発生した釜馬抗争に見られるように、釜山と馬山では比較的激しい社会運動が展開され、韓国民主化運動に与えた影響も大きいのではないかと鄭氏の問題関心が述べられている。このような従来韓国民主化運動に関する研究史のなかでの本研究の位置づけを行ったうえで、具体的な社会運動分析の手段として、イベント分析と政治的機会構造論を用いることを明示し、この二つの方法を用いる意味を簡単に説明している。

第1章では、鄭氏が取り上げる社会運動に関する従来理論レベルでの議論を整理しながら、上記の二つの分析方法、すなわちイベント分析と政治的機会構造論について、社会運動分析理論としての特徴を整理し、この二つの方法を用いることによって何が明らかになるのかを提示しようとしている。ここで鄭氏は、イベント分析を採用することにより「抽象論をこえて一つ一つの活動に関する参加者の目的、時間・空間的な情報、形態に基づく運動」の実態が明らかにできると述べ、政治的機会構造論を採用することにより、社会運動の性格を政治体制と関連づけて捉えることができるのではないかと述べている。

以上のような問題関心と当該テーマに関連する理論上の問題の整理を行ったうえで、第2章以降において、具体的な社会運動分析を行っている。

第2章及び第3章では、1979年10月に発生した釜馬抗争を取り上げている。まず第2章において、釜馬抗争が発生した当時の韓国全体及び釜山・馬山地域の社会的・経済的な状況について概観したうえで、釜馬抗争の具体的な運動の推移を詳細に明らかにしている。第3章では、まずイベント分析の手法を用いて、釜馬抗争のなかで行われた集会・デモ、警察との衝突、様々なスローガンに関するデータを運動関係の資料や新聞等からピックアップし、時間的推移とともにどのような変化が生じたかを明らかにしている。次に政治的機会構造論の観点から、釜馬抗争時の社会運動が極めて限られた政治的機会構造の下で運動を展開せざるをえない状況に置かれていたことを明らかにしている。

第4章及び第5章では、1987年の6月抗争時における、釜山と馬山地域における社会運動を、ソウルにおける運動の展開過程にも目配りしながら分析している。第4章において、6月抗争の全体的な流れを、6月抗争に至る韓国の政治状況の変化にも言及しながら説明し、そのうえで、釜山と馬山における運動の推移を論じている。第5章では、釜馬抗争の分析と同様に、イベント分析及び政治的機会構造論を用いて6月抗争時の釜山と馬

山における社会運動の分析を試みている。この分析を通して、釜馬抗争時の社会運動が地域的に孤立した運動であったのに対して、ソウルを中心とした運動と相互に連携があったこと、釜山と馬山においては、かつての釜馬抗争時の運動の記憶が動員されるかたちで運動の展開がなされたこと、釜馬抗争と比較して運動は自然発生的なものから組織性を有した運動に変容したこと、などが指摘されている。また、政治的機会構造についても、依然として一定の制約はあったものの、釜馬抗争時よりは様々な政治的機会が利用できる状況にあり、また、政府の側の政治的機会の制約を逆に運動への大衆動員のシンボルとして利用するという側面も見られたこと等を指摘している。

以上の検討から、本論文は「おわりに」において、本論文で取り上げた二つの時期の社会運動が、運動の自然発生性と組織性において大きな相違があるということ、政治的機会構造についてもまた二つの時期では相違が見られ、6月抗争期までに政治的機会が漸次拡大しており、そのことが社会運動の形態にも影響を与えていたことを指摘している。

3. 論文の評価すべき点

本論文は、韓国の民主化運動について、釜山と馬山という地方都市における運動の実態分析を通して新たな光を当てようとするものであり、従来光州事件やソウルの動向を中心とした韓国民主化運動の研究に新たな知見を与えるものと言える。と同時に、釜馬抗争及び6月抗争時点での釜山と馬山の社会運動について、様々なデータを収集したうえで運動の細部にわたって解明しようとしており、こうした地域における社会運動の実証的な研究という意味でも評価することができる。また、本論文で鄭有景氏が試みたイベント分析や政治的機会構造論に基づく社会運動分析は、他の社会運動を分析するに際しても試みて然るべき分析手法の一つと言えるであろうし、比較社会運動分析の試みとしても興味深い論点を示している。

4. 問題点

本論文で分析手法として用いているイベント分析と政治的機会構造論や、本論文のキーワードの一つである「民主化」という概念について、その理論史上の位置づけや概念規定に不明確な点がある。本論文の主たる課題が社会運動の実証的な歴史分析にあるとは言え、キー概念についての掘り下げた検討が必要である。

次に、釜馬抗争と6月抗争における社会運動について、様々なデータを収集し詳細な分析を行っていることは評価できるものの、一部資料批判が不十分なところがあること、釜山と比較して馬山に関する分析が充分ではないこと、等の問題点を指摘することができる。

る。

最後に、韓国民主化運動の展開過程のなかで、地域レベルの社会運動が果たした役割が無視できないものであったことや、時期的に社会運動の形態やスローガンが変化することが明らかにされているものの、1987年以降の韓国政治のさらなる変化にどのような影響を与えたのかという、よりマクロな視点からの検討も必要ではなかったかと思われる。と同時に、釜山・馬山以外の他の地域における社会運動の状況に言及できれば、当時の韓国の民主化過程において地域が有した意味がよりクリアーになったのではないかと思われる。

5. 総合評価

本論文は、前記のごとくいくつかの問題点はあるが、地域レベルでの社会運動の実証分析を通して韓国の民主化過程に新たな光を当てた研究であるといえる。分析に当たっては、運動団体が発行した記録集や回想録等に加え、地方新聞を含む新聞、警察資料、大学資料等、様々な資料を駆使している。また、韓国語文献だけではなく、日本語文献にも数多くあたりながら論文を作成しており、多大の労力を注いだ労作となっている。本論文は、今後の韓国の民主化運動研究に貴重な知見を与えており、また、韓国における地域レベルでの社会運動研究の進展にも寄与するものであるといえる。よって、審査員は全員一致で提出された論文「韓国における民主化過程と社会運動－釜馬地域の民主化運動を中心に－」を、博士（学術）の学位を与えるのに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合 否

審査委員

主査 (氏名) 平井一良

副査 (氏名) 志賀美英

副査 (氏名) 土居正典

副査 (氏名) 木村朗

副査 (氏名) 出水 董

平成20年2月12日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 鄭 有 景

学位論文題目

韓国における民主化過程と社会運動—釜馬地域の民主化運動を中心に—
(The Democratization Process and Social Movement in South Korea ; Focusing on
Democratic Movements in Busan and Masan)

最終試験の概要

鄭有景氏により申請された学位（博士）論文に関する最終試験は、平成20年1月29日に下記5名の審査委員により行われた。審査は、冒頭に申請者による学位申請論文の内容説明があった後、それぞれの審査委員から一定の評価を含む見解の表明と問題点の指摘がなされ、申請者はそれに応答する方式で進められた。

鄭有景氏の学位請求論文「韓国における民主化過程と社会運動—釜馬地域の民主化運動を中心に—」は、1970年代末から1980年代にかけての韓国における民主化運動について、主として韓国南部の都市、釜山と馬山における運動の実態を実証的に分析することを通して、同国の民主化運動の地域的な広がりを明らかにするとともに、地域レベルの運動を通して韓国民主化運動の特質を論じようとしたものである。釜山と馬山は、1979年の朴正熙暗殺事件直前に生じた釜馬抗争の舞台となった地域であり、また、韓国の民主体制移行に決定的な意味を持ったといわれる1987年の6月抗争に際して、激しい社会運動が展開された地域でもある。この釜山と馬山地域における社会運動を、韓国の政治体制の変容と関連づけながら、イベント分析と政治的機会構造論という二つの手法を用いて分析を試みている。まず、1979年の釜馬抗争について、当時の釜馬地域の社会経済

的な状況を概観したうえで、両都市における集会やデモに関するデータに基づいたイベント分析を通して、運動の具体的な展開過程を明らかにし、自然発生的な性格の運動であったことを指摘している。さらに政治的機会構造論の観点から、運動のスローガンや運動形態が当時の非民主的な政治体制と密接に関連していたことを指摘している。同様の分析手法を用いて、87年の6月抗争を分析し、運動の展開過程そのものの釜馬抗争との相違やソウルを中心とした運動との相互関係等に言及し、さらに80年代以降の韓国の政治体制の漸進的な変化が社会運動に与えた影響を論じている。以上の分析を通して、80年代を通して、釜馬地域における社会運動が自然発生的なものから組織性を有したものに變化し、また、民主化というスローガンの意味内容そのものが、韓国の政治体制の変容を受けて變化したのではないかと結論づけている。

各審査委員からは、本学位申請論文について、分析枠組みとしてのイベント分析及び政治的機会構造のもつ意義と問題点、釜馬地域とソウルないしは他の地域との運動の相互関連性や相違点について掘り下げが足りないのではないのか等の指摘がなされ、また依拠する資料の妥当性や韓国の民主化全体のなかで釜馬地域の社会運動が持った意味等についての意見交換がなされた。これらの指摘や意見交換のなかで示された問題点があるとはいえ、本論文は、光州事件やソウルの動向を中心とした従来の韓国民主化運動研究に対して、釜山と馬山という地域レベルでの運動を実証的に明らかにすることにより、韓国民主化運動研究に新たな知見を与えるものであると評価することができる。また、運動の分析のために様々な資料に当たっており、これまで必ずしも明らかではなかった運動の細部の様相まで踏み込んだ実証的な研究としても評価しうるものである。

以上により、鄭有景氏は博士（学術）の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合 否

試験委員

主査（氏名） 平井一臣

副査（氏名） 志賀美英

副査 (氏名) 土居正典

副査 (氏名) 木村 朗

副査 (氏名) 出水 薫